

第25回研究会より

平成29年7月1日

参加者 10人+森田智幸（山形大学講師）先生
会場：雪の里情報館

久しぶりということで、樋渡さんが多くの方に声をかけて大人数で行えた研究会となりました。

森田先生が撮影した小学校1年生の算数の授業をみてみなさんでその授業のすばらしさや奥深さについて意見を交流させました。

算数 単元：合わせていくつ、増えると

いくつ

課題：1～9の数字を使って縦と横を足し算する。同じ数字を2回以上使用しない。魔法陣の変形したもの

		たす
たす		

成功例

1	6	7
3	2	5
4	8	

失敗例

1	2	3
4	6	10
5	8	

意見交換から

・小学校 1 年生としてはこの教室内の落ち着きに驚く。ペアで聞きあう関係ができています。日直の児童の号令の声が小さいのに、他の児童は聞いている。

・児童の発言の意味がよくわからないときでも、授業者は勝手な解釈をせずに何度も児童に戻して聞いている。

・授業者がこの課題をするための“ポイント”という言葉を使っていたが、授業者のポイントと児童のポイントにややズレを感じた。面倒でも子どもが表出した言葉を使ってもよかったのではないか。

・先生のポジショニングのすばらしさ。子どもの目線まで姿勢を低くするための工夫（ビールケースにクッションを載せて座っている）が面白い。

・この教室には「先生！先生！」がない。ペアの子どもに聞いていたり、のぞき込んだりしている。

・小学校 1 年生には 1 年生だけの学びのプライドがある。

・この授業は数の分解の訓練になっていることがわかる。この課題は 100 マス計算とはまったく逆の世界での思考を求めている。アットランダムの中での試行錯誤。

・深い教材研究が必要だ。分数の掛け算で逆数をかける意味を問われたとき、どのくらい説明できる教師がいるのか。子どもの素直な疑問こそ、いちばんきつい。それでもその質問を想定しておくことが大切。今回の課題も、子どもの引っ掛かりがどこに出るのか、いろいろ考えておかないといけない。教師の学力が問われる。

森田先生より

○“ポイント”とか“コツ”は、低学年だからできないとかというわけではない。

このことについて言語化することが難しいということ。『身体知』という言葉がある。例えば「自転車の乗り方のコツを教える」は教えることが難しいように。自分で言語化したことをやっても難しいことが、Mさんの様子でわかる。人に伝わることは別問題ということ。計算の操作も身体知に近い。いちばん早く説いた児童のプロセスで思考法がわかるようになるといいと思った。

○ポイントということばが議論になったが、授業をみると、子どもにとってのポイントは子どもが苦勞しているところだということがわかる。そして、自分とは違う種類のポイントが出るのが隣の人。それこそがポイント。

○教師のポジショニングについても議論された。“構え”をつくることを共有することが大切。授業の途中に「ちょっと待って」と発表している児童の体の向き、授業者の立ち位置を変えたら、発表のボリュームが大きくなった。状況づくりや環境づくりなのだと思う。「グループで聞いてみる」ではなく、周囲の子どもの構えを作ることが大切

○「先生！先生！」がないのは、教師は学ぶ対象と子どもとの仲介者である意識をもっていることが重要だと思っている。教師の持っている答えは、どこからか持ってきているもの。本当は教師も答えを探しているという意識。

「あ、ごめん、先生もわからないから、今度まで調べてくる」という教師の発言はこれまではよくあったが、最近はめっきり聞くことがなくなった。それはどうということなのか。感じていることでもある。

○授業者が授業の後半で「こんなに（他にも答えのパターンが）でてきたよ」と言ったとき、授業者が授業を通して一貫してこだわっていたことがわかった。それは、本授業の早い段階で「他にもある？」と言ったとき、児童が「ない」といったことなのだろう。子どもはそんなに意味があって言ってはいないが、授業者は傷ついた。だから、そこにひっかけりをもって授業をしていたんだろう。

ひさしぶりに研究会を開催いたしました。校内授業研究会とは違って、さまざまな年代、お立場の方々の研修は本当に楽しく有意義なものであらためて感じます。

なんとか 2 か月に 1 回のペースで継続していきたいものです。森田先生がいらっしゃらないときの研究会では、難解な本を読んで、それを参加者と意見交流しながら解読していくという内容を提案しました。

第 1 回目は

『わかりかたの探求』佐伯 胖 著 を題材にします



戻る